

『世界を巡ったコーヒーの歴史』

1. コーヒーの現状について

- ・国別生産量順位、生産品種について述べる。生産国は北緯 25 度、南緯 25 度の間のコーヒーベルトと呼ばれる所に分布している。
- ・現在のコーヒー消費量について：①国別のコーヒー消費量では日本は世界 4 位。②一人当たりのコーヒー消費量では、日本はトップのノルエーの約 40%である。③日本におけるコーヒー国別輸入量はおおむね世界のコーヒー生産順位にしたがう。
- ・日本での有名な銘柄について簡単に述べる。

2. コーヒーの歴史とイスラム社会での扱い

- ・コーヒーの発見伝説にはエチオピア説とイエメン説があるが、有力なエチオピア説を説明
- ・イスラム教の僧侶達が、激しい修業の祈祷と瞑想に耽る時に陥りやすい、単調さのために襲ってくる睡魔を撃退し、うちつづく勤行を癒してくれるこの生果を盛んに食べたことからイスラム世界でのコーヒー普及が始まった。
- ・その後、イスラム教寺院内で儀式の一部として活用されたりして、イスラム社会での囲い込みが行われた。
- ・焙煎すると良い香りとはほどよい苦味が出ることを知る。これがトルココーヒーの始まりである。トルココーヒーの飲み方について説明する。
- ・コーヒーの普及につれて、回教寺院への参列者が少なくなり、コーヒー禁止令が出る。愛飲家の反対にあい、カイロで禁令がとけると、メッカでも解禁となる。
- ・1554 年コンスタンチノーブルに「カフェ・カーネス」というコーヒー店がオープン。

3. コーヒーがヨーロッパに伝わる

- ・ヨーロッパでの普及状況を、コーヒーハウスの普及状況から見てみる。
- ・ロンドンで最初にコーヒーハウスが開業したのは 1652 年。主に業界の人達の集まりの場として発展する。コーヒーハウス「ロイズ」はその後保険会社に発展する。多くのコーヒーハウスは「クラブ」に模様替えをする。
- ・パリのコーヒーハウス：1686 年有名な「カフェ・プロコプ」が創業。ここに集まった有名人について触れる。またフランス革命との関連についても述べる。
- ・ウィーンのコーヒーハウス：1683 年オスマントルコ軍の置き土産としてウィーンでコーヒーハウスが始まる。現在でも当時の状況が色濃く残っている。
- ・アメリカのコーヒーハウス：ボストンのコーヒーハウス「グリーン・ドラゴン」は独立戦争のきっかけをつくる。有名な「ボストン茶会事件」である。

4. コーヒー栽培の歴史

- ・コーヒー栽培についてはオランダ人が主役を演ずる。17 世紀初頭、インド人イスラム僧がアラビア・メッカからコーヒー種子を持ち出し、インド南部のマイソールで栽培に成功。1699 年にオランダ人は、インドからオランダ領ジャワ島へコーヒーの苗木を移植し、栽培に成功。1706 年バタヴィアからオランダ本社へ苗木が送られ、アムステルダム植物園で栽培・繁殖に成功。このコーヒー樹が世界に広まる。「コーヒー種苗の元祖」となる。
- ・コーヒー栽培にフランスも参加。1714 年オランダからルイ 14 世に献上されたコーヒー苗木は、パリの植物園で根づく。ルイ 14 世は、コーヒー愛好家として知られており、コーヒ

一樹を、フランス領植民地(中南米)に移植するよう命令を出している

- ・オランダ、フランス以外のイギリス、ポルトガル、スペインの活動について触れる。

5. 日本でのコーヒー事情：江戸時代

- ・コーヒーの栽培にオランダは大きな貢献をしているので、当然長崎出島のオランダ商館ではコーヒーが飲まれていた。出島を訪れた日本人に振る舞われたが、なぜか日本には普及しなかった。大田蜀山人のコーヒー飲用体験記は有名なのでこれらを紹介する。
- ・日本語の「珈琲」は宇田川榕庵の作字と推定されている。榕庵は江戸後期の蘭医・科学者。

6. 日本でのコーヒー事情：明治以降

- ・明治2年、外人エドワルズが横浜で新聞広告を出す。「生珈琲並焼珈琲」。
- ・明治8年日本人が「コーヒー製造」の新聞広告を出している。詳細不明。
- ・明治11年(1878)12月26日読売新聞に、神戸元町放香堂が広告を出している。「焦製飲料のコーヒー弊店にて御飲用或は粉末にてお求め共に御自由」と宣伝している。注目すべきは、①「挽き売り」のはしりであり、②コーヒーを店で飲ませたのであろう。
- ・明治21年に日本最初の本格的コーヒー店が上野に開店。その名は「可否茶館」で創業者は鄭永慶。時期尚早のようで、四年ほどで閉店した。
- ・明治44年以降：銀座に次々とカフェが開店。初めてカフェ(当時はカフェー)を店名に冠した「カフェー・プランタン」、「カフェー・ライオン」と「カフェーパウリスタ」である。
- ・中でも「カフェーパウリスタ」がコーヒー普及に大きな役割を果たす。パウリスタとは「サンパウロっ子」の意味。
- ・創業者は水野龍(りょう)。明治41(1908)年移民船笠戸丸は第1回ブラジル移民を乗せ、神戸を出航。水野は、この移民を企画し、移民団長としてブラジルへ。
- ・ブラジルでは、1888年に奴隷制度が廃止され、コーヒー栽培は人手不足になる。その危機を救ったのが、日本移民。勤勉に働く日本人移民は、珈琲の生産アップに大きく貢献した。
- ・明治43年サンパウロ州政庁は、水野の功績に対して、年間千俵のコーヒー豆の無償提供と東洋における一手宣伝販売権を与えた。水野は明治43年にカフェーパウリスタを設立する(フランチャイズ制)。本格コーヒーが、一杯5銭と破格な安さであり、気軽に入れる喫茶店として親しまれた。銀座店では1日4000杯のコーヒーが出た。何時間いても可であった。その後の展開についてはスライドで示す。

コーヒー・エピソード(1)「銀ブラ」：「銀座のカフェーパウリスタでブラジル珈琲を飲む」ことであるらしい。現在も「銀ブラ証明書」をパウリスタが発行している。

コーヒー・エピソード(2)大阪のパウリスタ：戎橋店と道頓堀店について述べる。

コーヒー・エピソード(3)甲陽園のパウリスタ：現在住宅地である甲陽園には大正時代から昭和にかけて撮影所などがある娯楽施設があった。その一角に[パウリスタ]があった。

コーヒー・エピソード(4)極上珈琲の秘密：この珈琲はセレベス高地で栽培されているアラビカ種の珈琲豆である。但し一度栗鼠の体内を通った特別のものだとか。

コーヒー・エピソード(5)作曲家とコーヒー：バッハ、モーツァルト、ベートーベンについてのエピソード

コーヒー国産化の試み

- ・コーヒーベルトに近い小笠原、沖縄、台湾などで試みられたがいずれも失敗する。
- ・最後に観光施設であるが、長崎空港近くの温室でコーヒーが栽培されている例を紹介する。

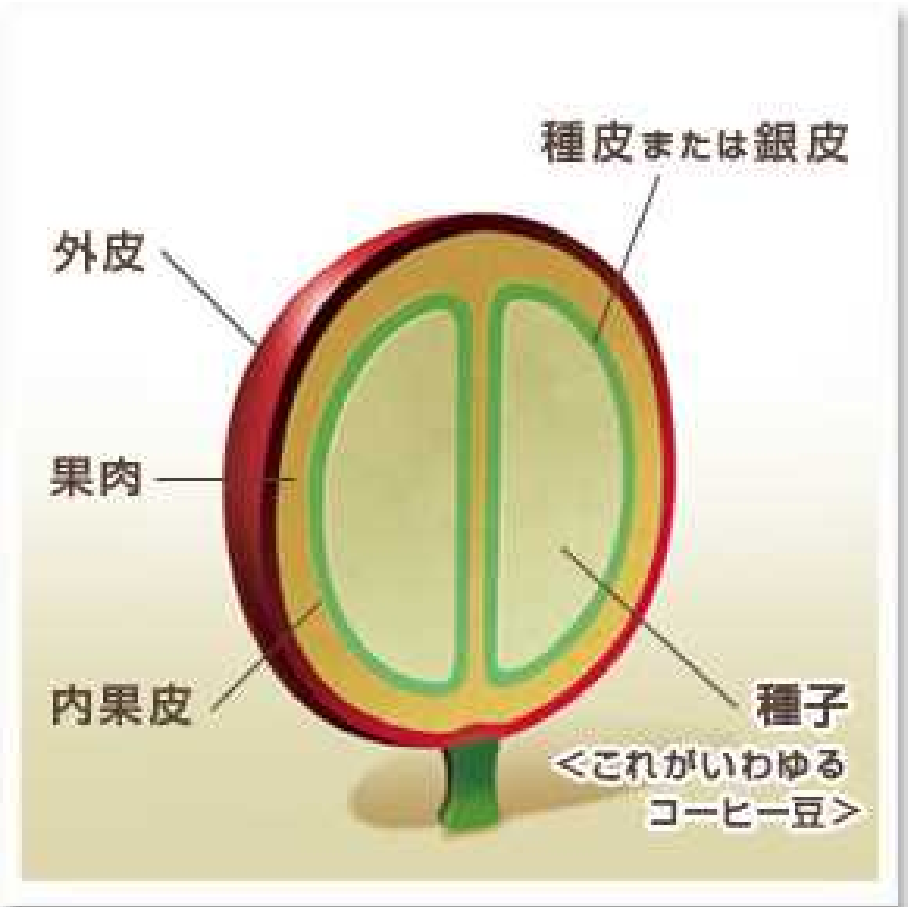
関西蔵前午餐会

世界を巡ったコーヒーの歴史

平成30年4月3日

田村 洋一

コーヒーの実



コーヒーの現状(1):世界の生産量

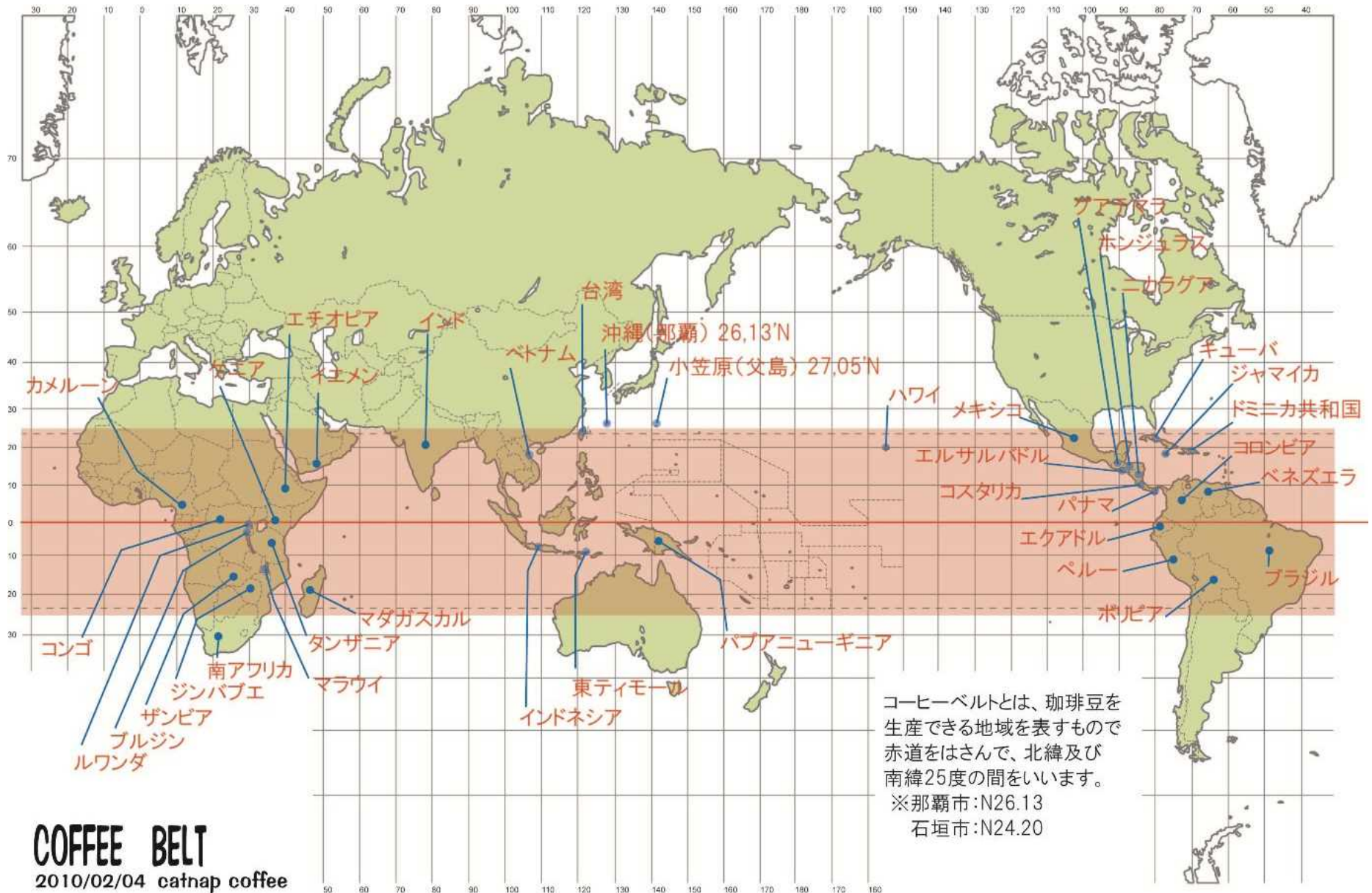
国別生産量 上位6ヶ国 単位:万トン

1	ブラジル	280.4	2	ベトナム	140.6
3	コロンビア	72.8	4	インドネシア	64.4
5	エチオピア	42.0	6	インド	30.5

コーヒーの主な品種

- ・ アラビカ種 : 約70% 色々な品種あり(約70種) 年平均温度20°C、気温の年較差の少ない、熱帯高地(500~1800m)で栽培される。
- ・ ロブスタ種 : 約30% 耐熱、耐病気に富むが品質は劣る。高温多湿の低地でも栽培可。主に缶コーヒー、インスタントコーヒーに用いられる
- ・ リベリカ種 : 約1%

コーヒーの現状(2): コーヒーベルト



コーヒーの現状(3):消費量

国別のコーヒー消費量(2006年 単位:万トン)

①アメリカ	121.8	②ブラジル	96	③ドイツ	51.5
④日本	43.6	⑤フランス	32.8	⑥イギリス	32.8

一人当たりのコーヒー消費量(2016年 単位:Kg/人・年)

①ノルウェー	9.0	②スイス	7.71	③ブラジル	5.92
④コスタリカ	5.19	⑤EU	5.14	⑥アメリカ	4.71

- ・日本は3.73 Kg/人・年で、ノルウェーの約40%。
- ・EU28カ国の内訳は、2014年から発表されていない。

2013年の統計では、ルクセンブルグが26.82 Kg/人・年で群を抜いている。これは関税の関係。

日本のコーヒーの国別輸入量(2016年 単位:千トン)

①ブラジル	137.9	②ベトナム	99.2	③コロンビア	67.2
④グアテマラ	37.1	⑤インドネシア	34.8	⑥エチオピア	18.6

コーヒーの現状(4): 有名な銘柄

ブルーマウンテン: ジャマイカ産。英国王室の御用達。生産量の約80%を日本人が消費。

モカマタリ: アラビア半島に富をもたらしたコーヒー。その積出港がモカ港。ここから各地に運ばれるコーヒーが「モカ」と呼ばれる。

モカハラー: アラビカ種 of 原種とされているものを、標高2000mのハラー地区で栽培。モカ独特の優雅な風味。

キリマンジャロ: タンザニアでケニア国境にあるキリマンジャロの麓。生産地としてモシやアリューシャが有名。

ハワイコナ: ハワイの土産として人気。生産量が少ないので、コナを10%以上使用していれば「コナブレンド」になる。コナコーヒー100%は高値の花。

マンデリントバコ: インドネシアのコーヒー。インドネシアでは90%がロブスタ種であるが、スマトラ島北部でマンデリン族が中心になってアラビカ種を栽培している。厳選された優良な豆だけがトバコである

コーヒーの発見とイスラム社会での支配（1）

- ・エチオピア説とイエメン説あり。エチオピア説が有力。しかし定説はない。
- ・「エチオピア(ナイル河上流)の高原で飼っている山羊が灌木の真っ赤な実を食べたら、興奮して跳ね回っていた。牧童が食べてみると、気分が爽快になった」という発見伝説。次スライド
- ・自生のコーヒーの実を、生のまま食べたり、色々な形で料理して食用にしたようである。その名残がエチオピア南部に見られるとのこと。
- ・イスラム教の僧侶達が、激しい修業の祈禱と瞑想に耽る時に陥りやすい、単調さのために襲ってくる睡魔を撃退し、うちつづく勤行を癒してくれるこの生果を盛んに食べたことから始まった。
- ・カリフ(教主)が病に罹った時、コーヒーを病床に捧げた。その結果が良かったので、神聖な聖薬とされた。

コーヒー起源伝説：エチオピアの踊る山羊



カルディの伝説

イスラム社会での支配（２）と焙煎の始まり

- ・その後、**生豆の煮汁**を飲むことが工夫考案された。
- ・1300年頃、アラビア人によって広められたコーヒーの煮汁利用風習は、イスラム圏に伝わったが、回教寺院内に秘蔵され、長い間門外不出であった。
- ・赤い土器に保存されたコーヒー汁を修道院の高僧が汲み取って僧や信者に順に渡していく。その間、「アラーのほかに神はなし、疑うことなきまことの神・・・」と祈りを捧げる。
- ・コーヒーの実を煮ている時に鍋の水がなくなり、中の実が焦げついた時、なんともいえない良い香りが立ち昇ったのに気付いた。そこであらかじめ実を煎ってから、湯に入れて飲んでみると、香りの高い 良い匂いと、気持ちの良い苦味が楽しめた。この方法はたちまち全回教圏諸国に広まった。これが**焙煎の始まり**。これがトルココーヒーとして普及した。

トルコ・コーヒーの飲みかた

- ・乾燥させた生コーヒーを、必要量だけ取り出し、鉄製の長い柄のついた焙烙と長柄のしゃもじを使って丁度よい色になるまで煎る。草で編んだ皿のようなものの上に移し、素早く冷ます
- ・大きな石臼に入れ、杵を使って搗き、細かい粉末にすることなく、ザラメ糖程度に砕く。それから真直な長い柄のついた鍋(イブリクという真鍮製で内側は錫張り)に湯を3分の1程入れて沸かし、砕いたコーヒーを入れて火にかざす。コーヒーから盛んに泡が出るので、こぼれないように、火から遠ざける。泡が静まったらまた火にかざす。これを3回程繰り返す。
- ・小さなカップに注いで供する。砂糖やミルクは一切使わないし、「コーヒー」を飲んだ後でも、水は飲まない。口の中に残っているコーヒーの後味を水で洗い流してしまうようなばかげたことは、決してしない。アラビア人は、1日平均20~30杯もコーヒーを飲む。

トルコ・コーヒー(再現)

現代版トルコ・コーヒーの淹れ方を再現

(焙煎し、挽いた粉を使用)

・使用用具: 銅または真鍮製の、長い柄のついたイブリック(右写真)で煮出し抽出する。

①コーヒーの粉と水を入れる。

イブリックに、微粉状に挽いたコーヒーの粉と水を入れる。

②弱火にかけて、スプーンで混ぜながら温める。

③泡が吹きたってきたら(右写真)、火から降ろす。スプーンで軽くかき混ぜてから、再び火にかける。3回ほど繰り返して、コーヒーを煮出す。



イスラム社会でのコーヒー禁止令

- 回教圏では、コーヒーの飲用は益々盛んになり、コーヒー店が出来始め、人々はここに集まって賭事をしたり、話に花を咲かせて、だんだん回教の儀式に参列する者が少なくなった。そのため、メッカの大僧正は、コーヒーは酒と同じように酩酊性飲物であるという理由をつけて、回教徒の飲用を禁止した。
- カイロでも禁止令が出たが、コーヒー愛飲党は、学者や医者を動員して、コーヒーは酒と異なるものだという証明をして、総統がコーヒー禁止令を解いた。カイロで禁止令が解かれると、間もなくメッカも解禁になった。
- 1554年コンスタンチノーブルに「[カフェ・カーネス](#)」というコーヒー店がオープン。ヨーロッパ各国のコーヒーハウスの原型となる。ここは社交と文化的役割を果たす。世界各地からの多くの人で賑わう。

コーヒーがヨーロッパへ伝わる

- ・十字軍に参加した兵士が、回教圏で香り高いコーヒーを飲んだ経験をそれぞれの国へ持ち帰っている。しかし、コーヒーは異教徒の飲み物であるという理由で、一般には飲まれていなかった。
- ・14世紀頃、イタリアでルネサンスが起こる。近代意識に目覚めた識者がコーヒーを放っておくはずがない。愛飲家が増えた。
- ・教義上、放っておけないのがキリスト教団。裁決を迫られた法王は、自ら試飲し、「斯くの如きおいしい物を、邪教徒の飲み物にしておくのはもったいない。余が自らこの飲み物に洗礼を施し、今日よりキリスト教徒の飲み物にしようぞ」と、裁決を下した。
- ・コーヒーはアレキサンドリアからイタリア商人の手によって、ヨーロッパへ持ち込まれる。コーヒーの普及状況をコーヒーハウスの誕生でみる。1645年ヴェネチア、1650年オックスフォード、1652年ロンドン、1660年代にアムステルダム、1672年パリ、1679年ハンブルグ、1683年ウイーン

ロンドンのコーヒーハウス

- ・ロンドンで最初にコーヒーハウスが開業した1652年は、清教徒革命が達成されて頃であり、酒場に代わるものとして歓迎された。
- ・セント・ジェームズ宮殿周辺のコーヒーハウスには政治家が、コベントガーデンのコーヒーハウスには文学者たちが足繁く通った。
- ・英国王立協会(科学者の集まり)は1660年に設立されたが、ハレー(ハレー彗星の発見者)らは、協会の会議後、コーヒーハウスに集っては議論を続けた。
- ・エドワード・ロイドは最新の海運情報を仕入れ、会報を定期的に発行した。その結果、**コーヒーハウス「ロイズ」**には、船長、船主、商人らが良く集った。これがその後発展して、ロイズ・オブ・ロンドンとして世界最大の保険市場となる。

ロンドン最初のコーヒーハウス跡



17世紀のロンドンのコーヒー・ハウスの様子

男性のみ入場可

農畜産業振興機構HPより



パリのコーヒーハウス

- ・1669年トルコ大使がルイ14世にコーヒーを伝える。
- ・1672年アルメニア人が街頭で寒い中暖かいコーヒーを提供。飛ぶように売れた。
- ・1686年有名な「カフェ・プロコプ」が創業。現在はレストラン。入口の円形の看板に過去の常連客の名前が金文字で刻まれている。ラ・フォンテーヌ、ヴォルテール、フランクリン、ダントン、マーラー、ロベスピエール、ナポレオン、バルザック、ユーゴーなど。
- ・ヴォルテールやルソーが使ったテーブルが保存されている。ヴォルテールやルソーなどの啓蒙思想がフランス革命に影響を与えた。
- ・ヴォルテールはここで一日50杯のコーヒーを飲んだと言われている。



パリのコーヒーハウス 「カフェ・プロコプ」

- ・現在はレストラン
- ・左はレストラン外観
円形の看板は写っていない様
- ・下: ヴォルテールやルソーが使ったテーブルが保存されている
- ・パリの中心街(サン・ジェルマン・デ・プレ)にある。
- ・フランス革命に影響を与えた啓蒙思想が議論されたようだ。
- ・日本のカフェパウリスタはここを模したという

フランス革命とコーヒー・ハウス

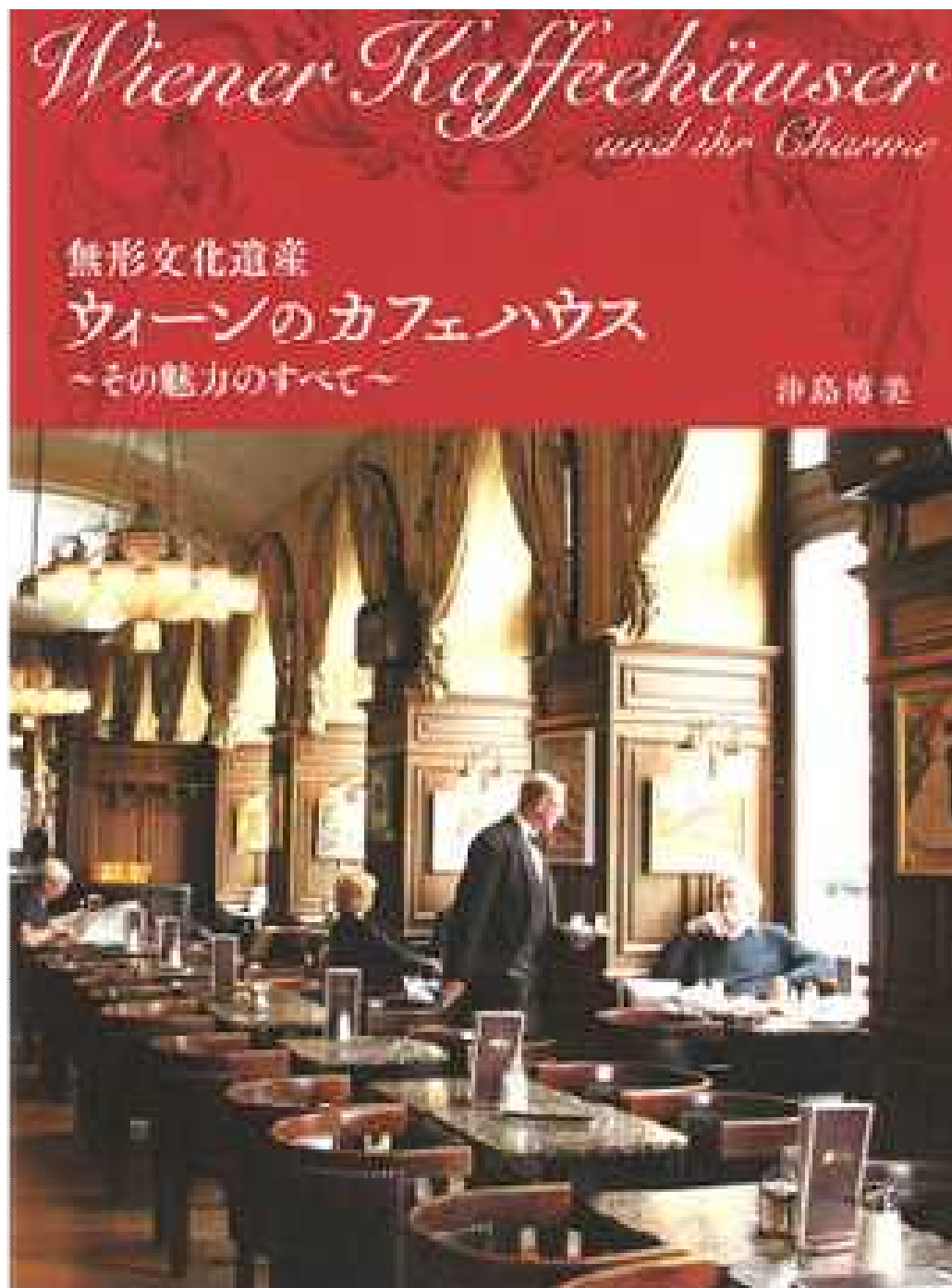
- ・旧体制では、人口のわずか2%の富裕な貴族、聖職者は納税義務が免れていた。
- ・アメリカ独立戦争への支援が主原因である財政危機で政情不安が増すが、有効な対策を打てない。
- ・ルイ16世は財務長官を罷免して、軍隊を招集した。
- ・1789年7月12日の午後、デムーランという若い弁護士がカフェ・ド・フォアの前で、拳銃を振りかざして「武器を取れ！民衆よ、さあ武器を取れ！」と叫んだ。
- ・これがきっかけとなって、パリはあっという間に混沌状態に陥り、2日後バスティーユ牢獄を襲撃した。
- ・フランスの歴史家ミシュレは「フランス革命はカフェから起きたのだ」と述べている。

ウィーンのコーヒーハウス

- 1683年、ウィーンはオスマントルコ軍に完全包囲され陥落寸前であった。コルシッキーという兵士が、トルコ軍の包囲網を突破し、援軍を求めた。ポーランド王率いる5万の軍がトルコ軍を撃退。
- 彼はトルコ軍が残していった多量のコーヒーと「赤い十字の家」を報奨としてもらった。
- 彼はウィーン初のカフェを開業。当初トルコ式コーヒーを提供したが、不評であった。ある時、誤ってコーヒーに砂糖を入れた。その後それに数滴のミルクを加えたのが、メランジェであり、ウインナー・コーヒーの代表としてウィーンで親しまれている。
- モーツァルトやベートーベンのトルコ行進曲は、軍楽隊を先頭にして行進するトルコ軍の落とし子。

ウィーンの コーヒーハウス

- ・無形文化遺産になっている。
- ・現在も市民から愛されている。
- ・右写真は、沖島博美著の本の表紙。
- ・ウィーンを旅行した時、このような情景を見た。
- ・無形文化遺産として継続できるのか？



ウィーンのカフェハウス(現在)



ウィーンのカフェハウスの定番は「メランジェ」。大きめのカップに「モカ」(濃いコーヒー)と温めたミルクを注ぎ、ミルクの泡を浮かべたものだ。

長方形の銀のトレイの左側にのせ、右側に水の入ったグラスと砂糖を添えてサーブするのがきまり。

ウィーンのカフェハウスには新聞が欠かせない。まだ新聞が一般に普及していなかった時代に、世界中のニュースを取り入れられるようにと始まったものだ。

トルコ軍の行進：現在の様子



アメリカのコーヒーハウス・独立戦争のきっかけ

- ・ヨーロッパからボストンへコーヒーが初めて導入されたのは1660年から1670年の間と思われる。
- ・「グリーン・ドラゴン」:ボストンで最も有名なコーヒー・ハウス。国家のあらゆる事件に関わりがあった。独立の謀議も。
- ・イギリスはコーヒー戦争でオランダ、フランスに敗れると紅茶に転換。「茶条例」で価格を吊り上げた。→アメリカの急進派を刺激し、ボストンに停泊中の東インド会社の船を襲い、紅茶を海中に投げ捨てた。
- ・「ボストンで茶会（ティーパーティー）を開いただけだ」と冗談を言ってごまかし、真犯人は検挙できなかった。Partyは「党」？
- ・これを契機にアメリカのコーヒー消費量が飛躍的に増加したと言われる。

コーヒー栽培はオランダ人が積極的

- ・17世紀初頭、インド人イスラム僧がアラビア・メッカからコーヒー種子を持ち出し、インド南部のマイソールで栽培に成功。
- ・オランダ人は1616年にコーヒーの樹をモカからオランダへ移植することに成功し、1658年スラウエシ島(現インドネシアのセレベス島)でコーヒー栽培に着手し、セイロンでも栽培を試みた。
- ・1699年にオランダ人は、インド南部からオランダ領ジャワ島へコーヒーの苗木を移植し、栽培に成功。オランダ領東インド諸島のアラビカ種の先祖となる。
- ・1706年バタヴィアからオランダ本社へ苗木が送られ、アムステルダム植物園で栽培・繁殖に成功。このコーヒー樹が世界に広まる。「コーヒー種苗の元祖」といえる。
- ・1714年にアムステルダム植物園で育成した苗木を、南米ギアナに移植。珈琲栽培の適地。新世界に渡った、最初のコーヒー樹
- ・1722年、オランダは栽培地を拡張。ジャワ、スマトラ、セレベス、バリ、チモール、ボルネオなどの島々に栽培の手を広げる。
- ・後、セイロン・ジャワで錆病発生。ロブスタ種が移植される。

コーヒー栽培にフランスも参加

- ・1714年アムステルダム市長からルイ14世に献上されたコーヒー苗木は、パリの植物園で根づく。ルイ14世は、珈琲愛好家として知られている。このコーヒー樹を、フランス領植民地に何とか移植させようと、命令を出している。
- ・仏領西インド諸島(マルチニーク島)に、王室植物園の苗木を移植することに成功する。1726年に最初の収穫。1777年には1880万本まで増加し、コーヒーの一大プランテーションとなる。西インド諸島でフランスが栽培の実権を握ることになる。
- ・1725年、フランス領ギアナ(南米大陸の北東部)にコーヒー樹を移植する。この苗木は、数年後、ハイチ、ドミニカにも移植される。
- ・1727年仏領ギアナで国境紛争が発生。ブラジルから沿岸警備隊副隊長が派遣され、彼とフランス総督夫人との恋が芽生えた。紛争終結後、別れの晩餐会で夫人から大きな花束が贈られた。その中にコーヒーの苗木が5本巧みに隠されていた。→ブラジルでの栽培開始といわれている。

オランダ・フランス以外の国々

- ・1728年、イギリス人が、マルチニーク島のコーヒー樹をジャマイカ島へ移植、後に「ブルーマウンテン」の名品を産することになる。
- ・1760年、ポルトガルはブラジルのアマゾン河流域へ、インドのゴアから樹を取り寄せ試植した。ブラジルの風土に適していた。リオデジャネイロに珈琲企業の本部を設立、その移植地域を拡大していった。各地で栽培に成功し、世界的な生産高を示すようになる。ブラジルでの栽培にはオランダの資本が関係している。
- ・1748年、スペイン人の手で、ベネズエラに、マルチニークの樹が移植され、コロンビア、エクアドル、ボリビアなどの各地にも移植。
- ・1790年、メキシコに西インド諸島の樹が移植され、1796年には、キューバからコスタリカに移植された(スペイン人による)。
- ・1850年頃に、中米各地、グアテマラ、ホンジュラス、エル・サルバドル、ニカラグアに、メキシコ及び西インド産の樹が移植され、これで移植時代は終わる。

江戸時代のコーヒー事情(1)

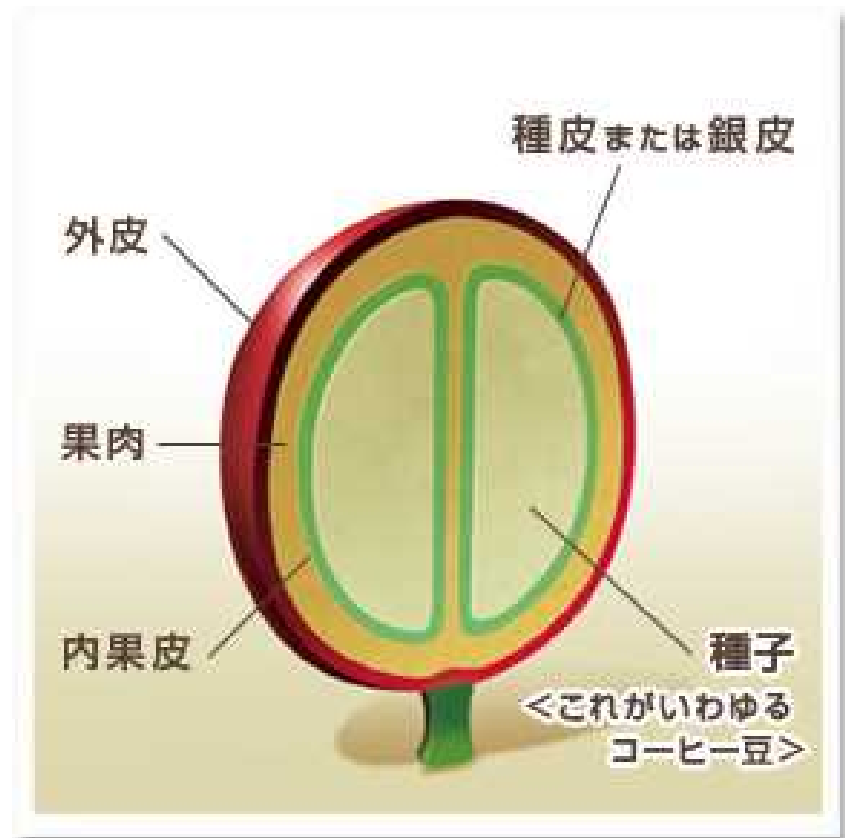
- ・オランダ領ジャワでコーヒー栽培が行われていたので、出島のオランダ人はコーヒーを常飲していたはず。
- ・オランダ人が親しい遊女に贈ったもののの中にコヲヒ豆とかコーヒーカンが含まれている。記録が残っている。
- ・出島に出入していた通詞は、出島でコーヒーを飲んでいるはずであるが、普及した様子はない。出島の医官ツンベルグは「日本の蘭通詞2, 3人はコーヒーの味を知っているが、旧習を保存し、外国人の持って来たものは採用しないのである」と記している。
- ・大田蜀山人のコーヒー飲用体験記は有名。「オランダ船でカウヒイを勧めてくれて飲んだ。これは豆を黒く炒って粉に砕き、砂糖を加えたものだが、焦げ臭くて飲めたものではなかった」

江戸時代のコーヒー事情(2)

- ・シーボルトは、「日本人は我々と一緒だとコーヒーを飲むのが好きだが、日本人に広がらないのが不思議だ」と言っており、日本でコーヒーを普及させるには「コーヒーは長寿に効くと宣伝することであろう。保健薬として推奨されるかもしれない」と言っている。
- ・江戸ハルマ(稲村三伯らが1796年に編纂)では、
Koffie : 都児規国の豆 と訳した
- ・日本語「珈琲」は宇田川榕庵の作字と推定される
- ・広辞苑: 珈は「婦人の髪の上に加える飾り」 琲は{動詞}「つらぬく」、{名詞}「たま飾り。多くの真珠にひもを通して二列にたらしした飾り」
- ・コーヒーの赤い実が「珈」であり、枝が「琲」に相当？

コーヒーの実

コーヒーの赤い実が「珈」であり、枝が「琲」に相当？
赤く熟するとさくらんぼに似ていることからコーヒーチェリーと呼ばれる



明治時代のコーヒー事情(1)

- ・ 明治2年、外人エドワルズが横浜で新聞広告。「生珈琲並焼珈琲」。居留地の外人目当てであろう
- ・ 明治8年日本人が「コーヒー製造」の新聞広告
- ・ 明治11年(1878)12月26日読売新聞に、神戸元町放香堂が広告。「焦製飲料のコフィー弊店にて御飲用或は粉末にてお求共に御自由」と宣伝。
注目すべきは、①「挽き売り」のはしりである。
②コーヒーを店で飲ませたのであろう。
- ・ 放香堂のホームページでは、コーヒーの輸入は慶応3年(1867)に開始した。喫茶店としての開業は明治11年としている。

天保年間(1830~43)に山城国に自家茶園を経営

明治時代のコーヒー事情(2)

- ・明治17年、伊藤博文婦人梅子を中心に鹿鳴館婦人慈善会のバザーで、コーヒーを売り、人気を博した。
- ・明治21年に日本最初の本格的コーヒー店が上野に開店。その名は「可否茶館」で創業者は鄭永慶。鄭は庶民のサロンをめざし、ビリヤード、トランプ、碁・将棋などの設備を備えた店をオープンしたが、時期尚早のようで、4年ほどで閉店した。
- ・その後いくつかの喫茶店が開業したが、発展せず。
- ・明治44年以降：銀座に次々とカフェが開店。初めてカフェ(当時はカフェー)を店名に冠した「カフェー・プランタン」、「カフェー・ライオン」と「カフェーパウリスタ」
- ・「カフェー・プランタン」：洋画家松山省三が開店。二階は会員制で、森鷗外や谷崎潤一郎など多くの文化人が名を連ねていた。芸術サロンの雰囲気。

明治時代のコーヒー事情(3)

- 「カフェー・ライオン」は、現在「銀座ライオン」として営業を続けている。
- 両店とも洋食に力を入れていたので、現在のレストランの位置づけ。共にコーヒー1杯が15銭。
- 「カフェーパウリスタ」がコーヒー普及に大きな役割を果たす。パウリスタ:「サンパウロっ子」の意味
- 創業者:水野龍(りょう)。明治41(1908)年移民船笠戸丸は第1回ブラジル移民を乗せ、神戸を出航。水野は、この移民を企画し、移民団長としてブラジルへ。
- ブラジルでは、1888年に奴隷制度が廃止され、コーヒー栽培は人手不足になる。その危機を救ったのが、日本移民であった。勤勉に働く日本人移民は、珈琲の生産アップに大きく貢献した。

ブラジル移民船笠戸丸の航路

YAHOOニュースより



第一回ブラジル移民船「笠戸丸」の航路（実線：往路、点線：復路）

明治時代のコーヒー事情(4)カフェーパウリスタ続き

- ・明治43年サンパウロ州政庁は、水野の功績に対して、年間千俵のコーヒー豆の無償提供と東洋における一手宣伝販売権を与えた。
- ・水野は明治43年にカフェーパウリスタを設立する(フランチャイズ制)。
- ・大正2年旧店を改装し三階建ての白亜の瀟洒な建物に。
- ・本格コーヒーが、一杯5銭と破格な安さであり、気軽に入れる喫茶店として親しまれた。銀座店では1日4000杯のコーヒーが出た。何時間いても可であった。
- ・繁盛し、事業を全国展開した。第一次世界大戦終了ころが最盛期で、全国で26店舗になった。神戸では、トアロードで営業した。三宮神社の北側。
- ・大正12年の関東大震災で東京地区の店が全滅したことと、同年にサンパウロ州からの無償供与期限が切れた。各店は経営責任者や共同経営者に譲渡された。
- ・神戸店は売却され、パウリスタという名で営業を続けた。戦後の一時期、駐留軍のダンスホールとして使われた

コーヒー・エピソード(1)「銀ブラ」

「銀ブラ」という言葉は、一般には「東京の繁華街銀座通りをぶらぶら散歩すること」(『広辞苑』)と信じられているが、「銀座のカフェーパウリスタでブラジル珈琲を飲む」ことであるらしい。銀座の銀とブラジルのブラを取って「銀ブラ」とした新語で、語源は慶応の学生たちが作り、流行させた言葉のようだ。(水島 (画家)『新東京繁昌記』)

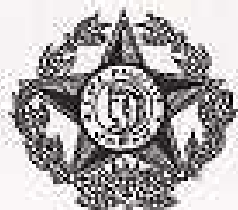
- ・カフェーパウリスタの前に時事新報社(福沢諭吉創業)があり、時事新報社へ出入する文士達とコンタクトが取れるということで、慶応の学生が良く集った。
- ・文芸誌『三田文学』の面々のたまり場でもあった。吉井勇の随筆に次のように書かれている。「三田文学に書いていた人たちは毎日、パウリスタに集っていたので、私もお仲間入りして、芸術を談じたりしたこともあった」

現在のパウリスタが発行する「銀ブラ証明書」



あなたは本日、銀ブラ（銀座通りを歩いて
カフェーパウリスタにブラジルコーヒーを
飲みに行くこと）を楽しんだ事を証明します。

平成 年 月 日



カフェーパウリスタ 銀座本店

東京都中央区銀座8-9 長崎センタービル1階

03-3572-6160

<http://www.paulista.co.jp>

コーヒー・エピソード(2)大阪のパウリスタ

- 戎橋店: 大正7年10月開業。大正13年に「ダンスホール・パウリスタ」に業態変更。関東大震災直後で、東京から移住してきた文化人や商人で、社交ダンスが流行。
- 大正15年12月25日大正天皇崩御。内務省は歌舞音曲を禁止。パウリスタではクリスマスを祝うダンスパーティーが行われた。警官隊が突入し、島之内署の豚箱入りとなる。「陛下の崩御を知らなかった」ということで、夜中の2時頃放免になった。
- 道頓堀店: 明治45年1月に浪花座の東二軒隣に開業。オールナイト営業を実施。学術講演会がよく行われており、大阪朝日新聞に案内が出て、誰でも参加可能
- 天王寺中学出身の作家、宇野浩二は毎日珈琲を飲みに来て、朝8時から夜12時位までいたことあり。

コーヒー・エピソード(3) 甲陽園のパウリスタ

- ・阪神間モダニズムにのって、甲陽園、甲子園、香櫨園、苦楽園などに娯楽施設が造られた。
- ・公園内にカフェ・パウリスタがあった。甲陽園を開発した本庄氏が大阪カフェ・パウリスタの社長をしていた関係。この建物は一昨年まで個人所有の家として使われていたが、平成28年9月に取り壊された。最後の1日だけカフェ・パウリスタが再現された。
- ・劇場・活動写真上映館・撮影所・植物園・遊園地などが造られ賑わいを見せた。高級料亭播半、料理旅館つるや支店などがあった。現ミシュランガイドで3つ星を獲得した日本料理店・小孫は当時から旅館を経営していた。
- ・大正13年には甲陽園線が開通し、便利となる。
- ・関東大震災(大正12年9月)の影響で、東亜キネマ甲陽撮影所で多くの映画が撮影された。エノケンの映画デビューはここである。

甲陽園内のカフェーパウリスタ

平成28年9月まで一般家屋として存続。

写真提供：西宮市情報公開課



甲陽園内の東亜キネマ甲陽撮影所

左からスタジオ、事務所、撮影所

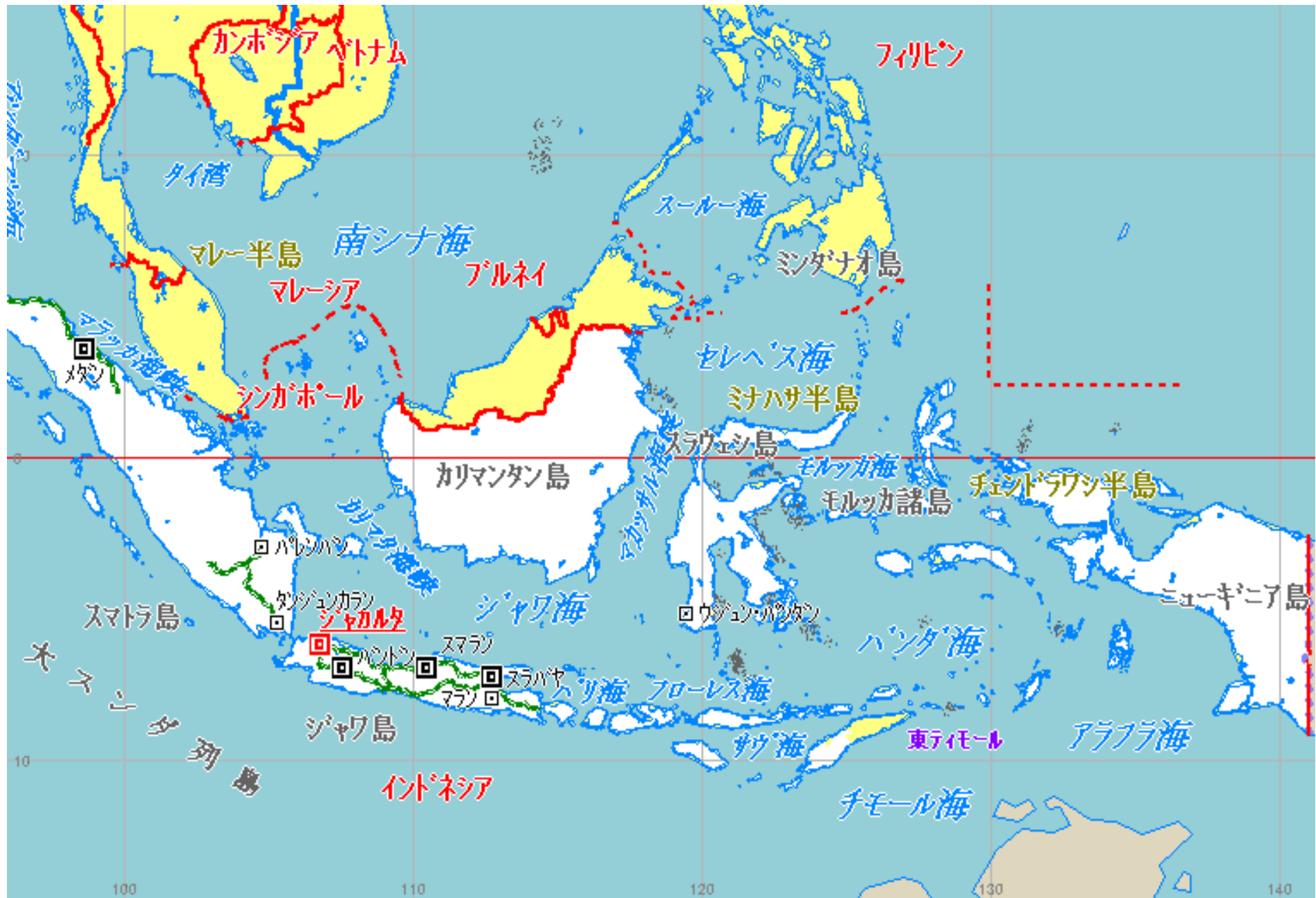
写真提供：西宮市情報公開課



コーヒー・エピソード(4) 極上珈琲の秘密

- 蘭領ニューギニアのある都市で、非常に旨い珈琲を飲ませてもらった。この珈琲はセレベス(現スラウェシ)高地で栽培されているアラビカ種の珈琲豆とのこと。但し一度栗鼠の体内を通った特別のものだとか。
- 地味、気候が珈琲の栽培に最適なセレベス島高原地帯には、沢山の栗鼠も棲んでいる。珈琲の花のしぼみかけを、栗鼠は大変好きである。花が萎れる頃には、珈琲豆も小さく結実している。
- 花と豆を区別できない栗鼠は両方食べる。豆は消化されずに糞となる。これを拾い集め、洗って乾燥させたものが、蘭領東インドで最高の品種とされている。
- 総督が毎年オランダ王室に献上するとのこと。
- 神戸税関長などを歴任した元大蔵官僚の話

セレベス(スラウエシ)島の位置



コーヒー・エピソード(5) 作曲家とコーヒー

- ・熱烈なコーヒー愛好家であったバッハは、コーヒーをテーマにした「おしゃべりはやめて、お静かに」(通称「コーヒー・カンタータ」)を作曲した。当時のドイツでは「コーヒー禁止令」が出されていた。コーヒー事情を風刺して、この曲を作ったと言われている。
- ・モーツァルトもまた、コーヒーに魅了された作曲家のひとりである。愛妻のコンスタンツェはコーヒーを淹れるのがうまく、モーツァルトは彼女の淹れたコーヒーを飲むことが大好きだったそうである。
- ・コーヒーに一番強い執着心を持っていたのは、ベートーヴェンであろう。「毎朝必ず1粒1粒、豆の数を数え上げ、きっちり60粒の豆を自慢のコーヒーミルで自ら挽いて飲んでいた」というのは有名な話。豆の数は、59粒でも61粒でも許さなかったといいうから、コーヒーには並々ならぬこだわりがあったのであろう。
- ・ナポレオンは「体を暖め、勇気を引き出してくれるこのコーヒーを兵士達に与えよう」と、軍隊の飲みものに初めてコーヒーを採用。

コーヒー国産化の試み

- ・小笠原諸島での栽培：明治11年ジャワよりコーヒー苗木を小笠原島の袋沢に移植。4年目に花が咲き、翌年には結実。明治17年には約4万本まで増えた。しかし、明治39年版の『小笠原島史』によると、コーヒーは砂糖黍に比べ、採算が悪く栽培する者なしと。
- ・沖縄での栽培：明治28年に小笠原島から移植によって、西表島で試みられたが、失敗した。
- ・台湾での栽培：明治31年台湾でも栽培が行われた。順調に進展したが、コーヒーの大敵サビ病が発生。日本政府、商社等コーヒー栽培に情熱を傾けたが、太平洋戦争の勃発で無になった。
- ・メキシコでの栽培：榎本武揚はオランダ留学などで、コーヒーになじみがあり、日墨植民協会を立ち上げ、メキシコの土地を取得し、明治30年に移民を送り出した。しかし調査不十分、資金不足などで失敗している。

国産コーヒー発祥の地？ ハウスでコーヒーの木を栽培 長崎空港(大村市)の少し北側



参考文献

1. 伊藤 博『コーヒー博物誌』(株)八坂書房 1993年発行
2. ウィリアム・ユーカーズ、山内秀文訳・解説『ALL ABOUT COFFEE コーヒーのすべて』角川文庫 2017.11.25
3. 河野雅信『知識ゼロからのコーヒー入門』幻冬舎 2009年
4. 関口一郎『新装・煙草と珈琲―その伝播史―』いなほ書房 2015.3.15第一刷
5. 長谷川泰三『日本で最初の喫茶店「ブラジル移民の父」がはじめた―カフェーパウリスタ物語』文園社 2008.11.17
6. 宮崎正勝『知っておきたい味の世界史』角川ソフィア文庫 2008.6.25初版発行
7. 阿川弘之『食味風々録』新潮社 2001.1.20
8. 加茂儀一『榎本武揚』中公文庫 1988.4.10